

新展示舎への引っ越しがゴリラの行動と来園者の印象に与える影響

濱田 千絵

【目的】近年動物園では、動物福祉の理念のもと様々な取組みがされている。それは動物の心身の健康のために行われるが、来園者が展示動物や展示舎に感じる印象にも影響する。京都市動物園は、本来樹上性の高いニシローランドゴリラのために、樹上空間を模した3次元構造物のある新展示舎を建てた。本研究では、より野生下に近い行動ができる新展示舎への引っ越しが、ゴリラの行動と来園者のゴリラやその展示舎への印象に与える影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】来園者への面接調査により「来園者のゴリラや展示舎への印象のデータ」を、来園者が動物を見る位置から観察者が行うゴリラの行動観察により「ゴリラの行動データ」と「来園者から見たゴリラの見え方のデータ」を収集した。調査は、旧展示舎では2013年12月6日から2014年2月11日までの間に9日間、新展示舎では2014年5月3日から2014年10月26日までの間に12日間行った。ゴリラは成体オス(父)、成体メス(母)、未成体オス(子)の3頭であった。

【結果と考察】新旧の展示舎間で、「ゴリラを見ていて楽しかったか」という質問項目に来園者がつけた評価得点は、高得点のまま変化しなかった。一方、来園者は旧展示舎よりも新展示舎の方が「良好な環境である」という評価をしており、「ゴリラが幸せそう」という来園者の評価は2つの展示舎間で変化はなかった。来園者は一定以上見た目が自然環境に近い展示舎になると、展示動物の幸せ度をそれ以上高く評価しなくなるのかもしれない。父、母、子の3頭のゴリラの内、母以外の2頭は、新展示舎に設けられた3次元構造物を用いる時間割合が増えた。よって、新展示舎になってからゴリラはより野生下に近い動きをしていたと言える。母と子については、旧展示舎に比べて新展示舎では「採食」が増え、「社会行動」と母子間の近接・接触が減った。原因は子の発達変化が考えられる。「遊び」「社会行動」はどちらの展示舎でも、来園者の印象に強く残っていた。「休息」は旧展示舎では来園者の印象にあまり残らなかったが、新展示舎では旧展示舎よりも強く印象に残るようになった。「採食」「移動」はどちらの展示舎においても、印象に残っていた。よって、旧展示舎では来園者の印象に残らなかった行動が、新展示舎では印象に残るようになった。来園者の視点から見た時、どの個体も旧展示舎に比べて新展示舎では来園者に背を向けている時間割合が増加した。しかし来園者の「ゴリラを見ていて楽しかったか」という質問項目への評価得点は高いままであった。新展示舎には観覧スペースが多いため来園者が自由に見やすいところからゴリラを観察できること、新展示舎になって3次元構造物が出来たこと、ゴリラと来園者の距離が近くなったことが来園者の「楽しかった」という評価を下げなかった理由かもしれない。旧展示舎では子が来園者の注目を集めていたが、新展示舎では父が来園者の注目を集めていた。新展示舎は旧展示舎に比べ、体の大きさや、その大きさにも関わらず高所で細い鉄柱上を動きまわられる身体能力といった、ゴリラの特性を魅力的に見せることができるようになったと考えられる。来園者の面接時にゴリラの個体名を利用しながら回答した人は「ゴリラは幸せそうか」という質問項目への評価得点が高い傾向があった。生き物の個別性や愛着性は、その生き物の「死」だけでなく「幸せ」についても深く考えたり、受け止めたりするかに関わるかもしれない。(比較行動学)